里芋の芽と不動の目

森鷗外

東京化学製造所は盛(さかん)に新聞で攻撃せられながら、兎(と)に角(かく)一廉(ひとかど)の大工場になった。

攻撃は職工の賃銀問題である。賃銀は上げて遣(や)れば好い。しかしどこまでも上げて遣るというわけには行かない。そんならその度合はどうして極(き)まるか。職工の生活の需要であろうか。生活の需要なんぞというものも、高まろうとしている傾(かたむき)はいつまでも止まることはあるまい。そんなら工場の利益の幾分を職工に分けて遣れば好いか。その幾分というものも、極まった度合にはならない。

工場を立てて行くには金がいる。しかし金ばかりで

は機関が運転して行くものではない。職工の多数の意志に対抗する工場主の一人の意志がなくてはならない。工場主は自分の意志で機関を運転させて行くのである。

社会問題にいくら高尚な理論があっても、いくら緻密(ちみつ)な研究があっても、己(おれ)は己の意志で遣る。職工にどれだけのものを与えるかは、己の意志でその度合が極まるのである。東京化学製造所長になって、二十五年の間に、初め基礎の危(あやう)かった工場を、兎に角今の地位まで高めた理学博士増田翼(たすく)はかく信じているのである。

製造所の創立第二十五年記念の宴会が紅葉館で開か

れた。何某（なにぼう）の講談は塩原多助一代記の一節で、その跡（あと）に時代な好みの紅葉狩（もみじがり）と世話に賑（にぎ）やかな日本一と、このこの女中達の踊が二組あった。それから饗応（きょうおう）があった。

三間（ま）打ち抜いて、ぎっしり客を詰め込んだ宴会も、存外静かに済んで、農商務大臣、大学総長、理科大学長なんぞが席を起たれた跡は、方々に群をなして女中達とふざけていた人々も、一人帰り二人帰って、いつの間にか広間がひっそりして来た。

もう十一時であろう。

今日の主人増田博士の周囲には大学時代からの親友

が二三人、製造所の職員になっている少壮な理学士なんぞが居残って、燗（かん）の熱いのをと命じて、手あきの女中達大勢に取り巻かれて、暫（しばら）く一夕（せき）の名残を惜んでいる。

　花房（はなぶさ）という、今年卒業して製造所に這入（はい）った理学士に、児髷（ちごまげ）に結った娘が酌をすると、花房が顧みながら云った。

「何だ。お前の袖（そで）からは馬鹿に好（い）い匂（におい）がするじゃあないか。何を持っているのだ。」

「これなの。」

　娘が絹のハンケチを取り出した。

「それだそれだ。匂で思い出したが、ここの内に丁度お前のような薫(かおる)という子がいたが、あれはどうした。」

「薫さんはお内へ帰りましたの。」

「内は何だい。」

「お医者さんですわ。」

「おお方誰(たれ)かが一旦(いったん)内へ帰して置いて、それからお上(かみ)さんにするというようなわけだろう。」

「知りませんわ。」

こんな話をしているうちに、聯想(れんそう)は聯想を生んで、台湾の樟脳(しょうのう)の話が始まる。樺太(からふと)のテレベン油の話が始まるのである。

増田博士は胡坐(あぐら)を掻(か)いて、大きい剛(こわ)い目の目尻(めじり)に皺(しわ)を寄せて、ちびりちびり飲んでいる。抜け上がった額の下に光っている白目勝(がち)の目は頗(すこぶ)る剛い。それに皺を寄せて笑っている処がひどく優しい。この矛盾が博士の顔に一種の滑稽(こっけい)を生ずる。それで誰でも博士の機嫌の好い時の顔に対するときは、微笑を禁じ得ないのである。

誰やらが、樺太のテレベン油は非常な利益になりそうで、始て製造を試みた何某の着眼は実にえらいという評判だと云うと、黙って酒を飲んでいた博士が短い笑声を洩(もら)した。

「あれか。あれは樺太へ立つ前に己（おれ）の処へ来たから、己が気を附けて遣（や）ったのだ。」

一同耳を欹（そばだ）てた。この席にいるだけのものは、皆博士が人の功を奪うような人でないことを知っている。それだから、皆博士のこの詞（ことば）に信を置くのである。

博士は再び無邪気らしい、短い笑声を洩（もら）して語り続けた。

「あればかりではないよ。己の処へは己の思付を貰（もら）いに来る奴が沢山あるのだ。むつかしく云えば落想とでも云うのかなあ。独逸（ドイツ）語なら Einfaelle（アインフェルレ） 匀とでも云うのだろう。しかし己は嘘（うそ）は言わないから、誰も落ち

込みはしない。己は遣って来る人の性質や伎倆（ぎりょう）や境遇を見て、その人に出来そうな為事（しごと）を授けるのだ。それで成功したものが、これまでに随分あるよ。妻がいつも傍（そば）で聞いていてそういうのだ。あなたそんなにお金になるような事を沢山知っていらっしゃるなら、御自分で少しして御覧なすってはどうですと云うのだ。女なんというものは馬鹿なものだ。なんでも余所（よそ）でする事を好い事だと思っている。己には己の為事がある。己なんぞは会社の為事をして給料を貰っていりゃあ好いのだ。為事は一つありゃあ好いのだ。思付なんぞはいくらでもあるから、片っ端から人にくれて遣る。そ

れを一つ摑(つか)まえて為事にする奴が成功するのだ。中には己の思付で己より沢山金をこしらえるものもある。金が何だ。金くらい詰まらないものが、世の中にぁりゃあしねえ。」

博士はそろそろ巻舌(まきじた)になって来た。博士は純粋の江戸子(えどっこ)で、何か話をして興に乗じて来ると、巻舌になって来る。これが平生寡言沈黙の人たる博士が、天賦の雄弁を発揮する時である。そして博士に親しい人々、今夜この席に居残っているような人々は、いつもこういう時の来るのを楽み待っているのである。

博士は虚(から)になった杯を、黙って児髷(ちごまげ)の子の前に出し

て酒を注がせて、一口飲んで語り続けた。
「金が何だ。会社は事業をするために金がいる。己はいらねえ。己達（おれたち）夫婦が飯を食って、餓鬼共（ども）の学校へ行く銭（ぜに）が出せれば好い。金を溜（た）めるようなしみったれは江戸子じゃあねえ。」
　こういう話になると、独り博士の友達が喜んで聞くばかりではない。女中達も面白がって聞く。児髷の子供も、何か分からないなりに、その爽快（そうかい）な音吐（おんと）に耳を傾けるのである。
　胡麻塩頭（ごましおあたま）を五分刈にして、金縁の目金を掛けている理科の教授石栗（いしぐり）博士が重くろしい語調で喙（くちばし）を容（い）れた。

「一体君は本当の江戸子かい。」

「知れた事さ。江戸子のちゃきちゃきだ。親父は幕府の造船所に勤めていたものだ。それあの何とかいう爺(じ)いさんがいたっけなあ。勝安芳(かつやすよし)よ。勝なんぞも苦労をしたが、内の親父も苦労をしたもんだ。同じ苦労をしても、勝は皺(しわ)い命を持っていやぁがるから生きていた。親父はこっくり行き着いたのだ。病気も何もないのに死んだのだ。兄きは大鳥圭介(けいすけ)に附いて行っちまう。お袋と己とは広徳寺前の屋敷にぼんやりしていると、上野の戦争が始まった。門番で米搗(こめつき)をしていた爺いが己を負(お)ぶって、お袋が系図だとか何だとかいうようなも

のを風炉敷(ふろしき)に包んだのを持って、逃げ出した。落人(おちうど)というのだな。秩父在(ちちぶざい)に昔から己の内に縁故のある大百姓がいるから、そこへ逃げて行こうというのだ。爺(じ)いの背中で、上野の焼けるのを見返り見返りして、田圃道(たんぼみち)を逃げたのだ。秩父在では己達を歓迎したものだ。己の事を江戸の坊様と云っていた。」

「なんでも江戸の坊様に御馳走をしなくちゃあならないというので、蕎麦(そば)に鳩(はと)を入れて食わしてくれたっけ。鴨南蛮(かもなんばん)というのはあるが、鳩南蛮はあれっきり食った事がねえ。」

「そうしていると打毀(ぶっこわし)という奴が来やがった。浪人

ものというような奴だ。大勢で押し込んで来やがるのだ。親父がぴょこぴょこお辞儀をして、酒樽（さかだる）の鏡を抜いて馳走（ちそう）をしたもんだから、拍子抜がして素直に帰って行きゃあがった。ところが二三日するとまた遣って来やがった。倅（せがれ）の方は利かねえ気の奴だったから、野猪狩（ししがり）に持って行く鉄砲を打ち掛けた。そうすると奴共慌てて逃げてしまやぁがった。」

「そのうちに世間が段々静かになって来た。己は毎日毎日土蔵の脇（わき）で日なたぼっこをしていた。頭の上の処には、大根が注連縄（しめなわ）のように干してあるのだな。百姓の内でも段々厭（あ）きて来やがって、もう江戸の坊様を大

事にしなくなった。鳩南蛮なんぞは食わしゃあしねえ。」

「ある日の事、かますというものに入れた里芋を出しやがって餓鬼共にむしらせていやぁがるのだ。餓鬼は大勢いたのだ。むしって芽の所を出して見て、芽の闕(か)けた奴は食う方へ入れる。芽の満足でいる奴は植える方へ入れるのだ。己が立って見ていると、江戸の坊様も手伝ってお遣(やり)なさいと抜かしやぁがる。大(だい)ぶ江戸の坊様を安く踏むようになりゃあがったんだな。こうなっちゃあ為方(しかた)がねえ。己もそこへ胡座(あぐら)を掻(か)いて里芋の選分(よりわけ)を遣っ附けた。ところが己はちびでも江戸子だ。

こんな事は朝飯前だ。外(ほか)の餓鬼が笊(ざる)に一ぱい遣るうちに、己は二はい遣るのだ。百姓奴(め)びっくりしやぁがった。そして言草(いいぐさ)が好いや。里芋の選分(えりわけ)は江戸の坊様に限ると抜かしやぁがる。」

「そのうち、もう江戸へ帰っても好さそうだというので、お袋と一しょに帰って来た。兄きは今の戸山学校の処に押し籠(こ)められていたものだ。お袋は早く兄きが内へ帰られるようにというので、小さい不動様の掛物を柱に掛けて、その前へ線香を立てて、朝から晩まで拝んでいた。」

「そこへ兄きがひょっこり帰って来た。お袋が馬鹿に

喜んで、こうして毎日拝んだ甲斐（かい）があると云って不動様の掛物の方へ指ざしをしたのだ。そうすると、兄きは妙な奴さ。ふうん、おっ母さんはこんな物を拝んだのですかと云って、ついと立って掛物の前に行って、香炉に立ててある線香を引っこ抜くのだ。己はどうするかと思って見ていたよ。そうすると、兄きは線香の燃えている尖（さき）を不動様の目の所に追っ附けて焼き抜きやがるのだ。片っ方が焼穴になったら、また片っ方へ押っ附けて焼き抜きやあがるのだ。とうとう両方共焼穴にしてしまやぁがった。」

「兄きは妙な奴だったよ。それ何とか云ったっけ。う

ん、田口卯吉（うきち）というのだ。あれなんぞが友達だったのだ。旧思想の破壊というような事に、恐ろしく力瘤（ちからこぶ）を入れていたのだな。不動様の罰だか、親の罰だか、知らねえが、間もなく病気になって死んじまやぁがった。」

「まぁ言って見れば、Fanatiker（ファナチィケル）というような人間だったのだな。古くなったがらくたを取り片附けなけりゃあならない時代には、あんな焼けな人間も道具かも知れない。兄きなんぞも、廻（めぐ）り合せでは大きい為事（しごと）をしたのかも知れねえんだよ。」

「己なんぞも西洋の学問をした。でも己は不動の目玉

は焼かねえ。ぽつぽつ遣って行くのだ。里芋を選(よ)り分けるような工合に遣って行くのだ。兄きなんぞの前へ里芋の泥だらけな奴なんぞを出そうもんなら、かます籠(かご)め百姓の面(つら)へ敲(たた)き附けちまうだろうよ。」

「己は化学者になって好かったよ。化学なんという奴は丁度己の性分に合っているよ。酸素や水素は液体にはならねえという。ならねえという間はその積りで遣っている。液体になっても別に驚きゃあしねえ。なるならなるで遣っている。元子(げんし)は切ったり毀(こわ)したりは出来ねえ。Atom(アトオム) は atemnein(アテムネイン) で切れねえんだという。切れねえという間はその積りで遣っている。切れ

たって別に驚きゃあしねえ。切れるなら切れるで遣っている。同じ江戸子でも、己は兄きのようなFanatiker（ファナチィケル）とは違うんだ。どこまでもねちねちへこまずに遣って行くのも江戸子だよ。ああ馬鹿に饒舌（しゃべ）ったな。もう何時だろう。」

花房は小さい金時計を出して見た。

「十二時です。」

「そうか。諸君は車が待たせてあるから好いが、己はぐずぐずすると電車に乗りはぐれる。さあ、行こう行こう。」

（明治四十三年二月）

底本：「普請中　青年　森鷗外全集２」ちくま文庫、筑摩書房
　　　１９９５（平成７）年７月24日第１刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年４月～９月刊
入力：鈴木修一
校正：mayu
２００１年７月31日公開
２００５年11月16日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。